

# 令和4年度普及活動の実績

## 普及活動の軌跡

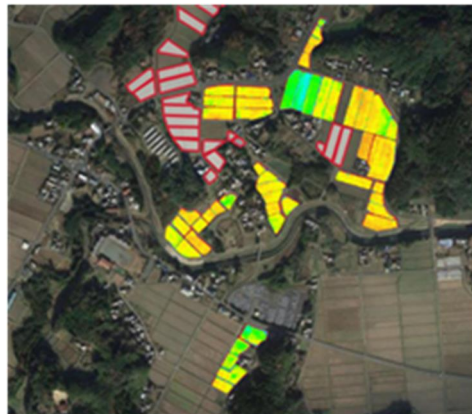
(Part - 28)



いちご相互ほ場巡回



農業経営体育成セミナーオリエンテーション



リモートセンシングにより作成された  
生育状況マップ



ねぎの株間比較試験

令和5年3月  
長生農業事務所  
長生農業改良普及事業協議会

## 成果集発刊に当たって

長生地域の農業は、温暖な気候の下、生産者の高い技術と意欲で築き上げられた「長生／ながいきブランド」の産地として発展してきました。

令和4年度の普及指導計画は、今年度から展開する「第6次長生地域農業振興方針」に基づき、「地域を支える多様な担い手の育成・確保」、「力強い園芸産地づくり」、「水田をフル活用した水田農業経営の安定化」、「畜産経営の体質強化」について、農業・農村の活性化、安全な食糧の安定供給、気候変動及び自然災害等への対応を含めた普及指導課題に取り組みました。

担い手の育成については、新規就農希望者に対し関係機関と連携して営農開始に向けた支援を行うとともに、安定的な経営を行えるよう、学習の機会を設けることにより栽培技術・経営管理の能力向上に向けた指導を行いました。親元就農など後継者のいる経営体に対しては経営継承を計画的に進められるよう支援しました。

長生地域の主力品目であるトマト、ねぎ、たまねぎ、梨などでは、産地の維持・振興に向けて、新たな担い手の確保、機械導入等による省力化、地域に適合した施肥管理や病虫害防除技術の向上等の活動を展開しました。

水田営農については、稲作の収益力向上を目指し技術改善に取り組むとともに、集落営農組織や個別経営体の経営改善を支援しました。畜産では、高騰する輸入飼料への対応として耕畜連携の推進とコントラクター組織を利用した国産粗飼料の安定生産を推進しました。

新型コロナウイルスの蔓延は、当地域の農家経営を直撃しています。また、新しい生活様式での活動が必須となり、普及活動も多くの制約が生じていますが、令和4年度においても活動手法の創意工夫を常に行いながら、計画的に普及活動を実施しました。

本冊子では、令和4年度の上記活動の中から、「普及活動の成果・報告」4課題、「情報提供」7課題について、生産者の皆様をはじめ、市町村、農業団体、試験研究機関等の協力を得ながら「普及活動の軌跡 P a r t - 2 8」として取りまとめました。

これらを今後の長生地域での農業振興、事業推進等に御活用いただければ幸いです。

令和5年3月

長生農業事務所  
所長 中嶋 浩之

# 令和4年度普及活動成果集「軌跡」

## 目 次

### 1 普及活動の成果・報告

- (1) 集落営農組織の持続的発展に向けた取り組み・・・・・・・・・・1  
— 雇用導入に向けた環境づくりとリモートセンシングの活用 —  
【第22回千葉県普及活動成果発表大会発表課題】
- (2) たまねぎ産地の維持・発展・・・・・・・・・・4  
— 規模拡大と安定経営に向けて —
- (3) 小菊の会の活動を通じた栽培技術の向上・・・・・・・・・・7  
— 直売所出荷する生産者グループ活動への支援 —
- (4) 長生地域の青年農業者の育成・・・・・・・・・・9  
— 農業経営体育成セミナーを通じた仲間づくり —

### 2 情報提供

- (1) 水稲での家畜ふんたい肥の利用・・・・・・・・・・11  
— 飼料用米栽培でのコスト低減化 —
- (2) ねぎの契約出荷に適した株間の検討・・・・・・・・・・13  
— 簡易規格の活用促進 —
- (3) 稲WC S生産コントラクターのゆとりある収穫作業に向けて・・・・・・・・15  
— 早生型稲WC S専用品種「つきはやか」の取組 —
- (4) 「長生トマト」の販売力アップに向けて・・・・・・・・・・16  
— 市場への聞き取りや他産地視察の取組 —
- (5) 「幸水」の適期管理による収量の維持・・・・・・・・・・17  
— 「ながいき梨」の大玉生産・出荷をめざして —
- (6) 観光・直売いちごの経営力向上・・・・・・・・・・18  
— 「長生いちご研究会」の活動を通して —
- (7) 労務管理、人材育成、経営継承等の支援による経営改善の取組・・・・・・・・19  
— 中小企業診断士等との連携による高度な経営課題の解決 —

### 3 参 考

- (1) 令和4年度普及現地情報・・・・・・・・・・20
- (2) 主な出来事・・・・・・・・・・23



# 集落営農組織の持続的発展に向けた取り組み

## － 雇用導入に向けた環境づくりとリモートセンシングの活用 －

### 活動事例の要旨

農事組合法人長南町東部営農組合では、構成員の高齢化が問題になっているため、組織の維持発展へ向けて、就業規則の整備等により雇用導入へ向けた環境づくりと、リモートセンシング等を活用した栽培管理技術の向上と技術の標準化を支援した。

これにより、組織内の雇用の導入に向けた準備が進み、組織内で話し合いを進める中で構成員は自らの働き方についても考えるようになった。また、リモートセンシングの活用により、これまで“経験と勘”であった栽培技術が“データ化”され、組織の栽培技術の標準化の足がかりができた。

### 1 活動のねらい・目標

中山間地域である長南町は、担い手不足が問題となっていたことから、農業事務所は長南町等と連携して、集落営農組織の設立と設立後の育成へ向けた支援に取り組んできた。これまで長南町内で7つの営農組織が設立されており、その中でも設立から約40年以上経過した農事組合法人長南町東部営農組合は経営も安定し、再基盤整備にも取り組んでいるが、「将来の経営陣になり得る人材を雇用できる体制の構築」が課題となっていた。

そこで、組合の後継者育成の環境づくりとともに、今後の継続的な経営を視野に雇用した人材の作業を標準化できる仕組みづくりを支援した。また、生産性が維持されるよう、リモートセンシングを活用した栽培状況の見える化、データ化による栽培管理技術の向上に取り組んだ。

### 2 活動の内容

#### (1) 雇用導入に向けた環境づくり

##### ア 就業規則、給料表の作成

雇用を導入するにあたり、労働条件を整備して、優良な人材を確保するために就業規則等の作成支援を行った。ちばの次世代農業経営体確保・育成事業を活用して専門家を招き、組合員と検討を重ね、休日の確保(年間でも104日は最低限必要)や、基本給与(賞与や地域の基本給与と比較等)を決定し、就業規則及び給料表の作成を行った。

##### イ 作業マニュアルの作成

雇用導入の際に雇用者の育成環境が未整備なだけでなく、作業の標準化も不十分だったことから、畦塗りや水稻の播種作業等の作業マニュアルを動画で作成した。

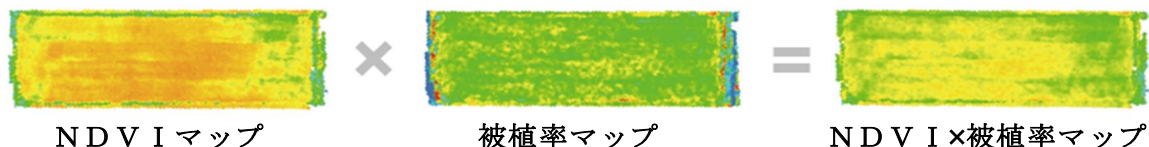


図1 畦塗り作業マニュアルの作成  
(動画の一部抜粋)

## (2) リモートセンシングの活用

### ア 生育のバラツキの「見える化」

飼料用米多収専用品種「アキヒカリ」の収量向上に向け、長南町と機械メーカーと連携し、ドローンによるリモートセンシングを実施し生育マップ（NDVI<sup>注1</sup>（生育状況）マップ、被植率<sup>注2</sup>（繁り具合）マップ、NDVI×被植率マップ）の作成を行った。



注1) NDVI：葉色 (SPAD) と相関関係にあり、植物の生育状況の分布

注2) 被植率：茎数と相関関係があり、植物の密度分布 (繁り具合)

1回目の撮影は幼穂形成期に行い、ほ場ごとに地力のばらつきと初期生育量を確認した。2回目の撮影は穂揃い期から出穂期の間に行い、一発肥料の性能や効果を確認した。

### イ 収量のバラツキの「見える化」

収量コンバインで収穫し、ほ場内の収量差を「見える化」する収量マップを作成した。これを、生育状況マップと比較することで収量と生育の相関を確認した。

### ウ 可変施肥の実践

リモートセンシングによる生育状況マップを基に施肥マップを作成し、可変施肥田植機で移植時の施肥量を調整した。次年度も生育状況マップを作成することで、技術の有効性を確認し生産者と共有した。

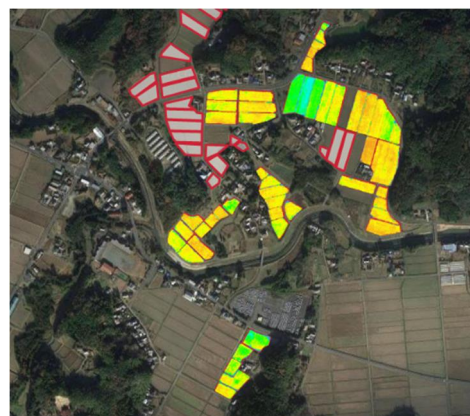


図2 リモートセンシングにより作成されたNDVI（生育状況）マップ

## 3 活動の成果

### (1) 雇用導入に向けた環境づくり

就業規則の作成を通して、組合員内での意見交換が活発に行われ、組織の継続・発展へ向けた問題意識が醸成された。

組織内で技術の伝承の重要性やその方法について検討され、作業マニュアルの作成に積極的に取り組んだ。また、現在の組織体制や労務管理の改善意識が高まり、雇用を導入するだけでなく構成員の働き方改善についても話し合いが行われるようになった。

## (2) リモートセンシングの活用

リモートセンシングの解析結果から、令和3年度の撮影で葉色や生育のばらつきを確認し、肥料不足による幼穂形成期の葉色や茎数が不足していることが明らかになった。この生育状況マップから施肥マップを作成し、令和4年度は移植同時の変換施肥を行った結果、前年と比較して幼穂形成期の生育量、ばらつきが改善された(図3参照)。

なお、施肥量についても事前に設定することで、誰が田植え作業を行ってもほ場毎で決まった施肥量が可能になるため、自動操舵と組み合わせることで初心者でも質の高い作業ができると考えられた。

リモートセンシングにより、これまで「ほ場毎のばらつき」は生産者個人の“経験と勘”に頼っていたが、“データとして見える化”され、客観的に把握できるようになった。

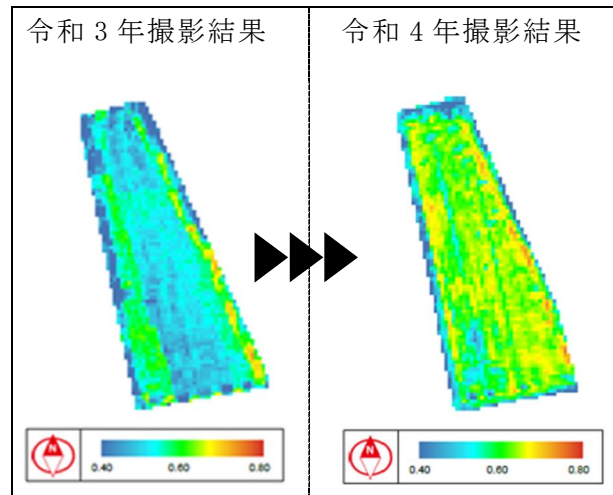


図3 幼穂形成期におけるNDVI(生育状況)の変化(可変施肥による生育ムラ改善)

## 4 将来の方向と課題

集落営農組織で雇用導入の環境が整い、若い従業員を確保できれば、組織の若返りや活性化が期待できる。組織の「成長」と「安定」を図るため、作業マニュアルや人事評価制度を確立し、技術継承も可能な体制づくりを支援する。また、リモートセンシングを活用した「見える化」は、生産性の向上と共に栽培技術の標準化が期待できる。加えて、従業員の早期育成にも活用が期待されるため、今後も継続したデータの蓄積を支援する。

さらに個別の営農組織の設備の限界により請け負いきれない事態が予想されることから、地域の集落営農組織間、個別生産者間の広域連携による新たな地域営農の仕組みづくりに取り組み、地域の水田営農の「発展」を図る。

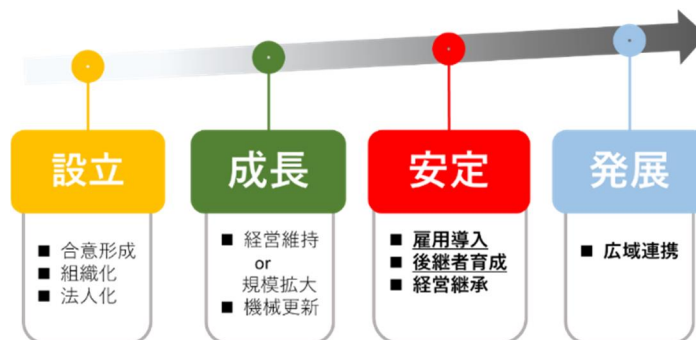


図4 集落営農組織の課題と方向性

## 5 担当者 西部グループ 佐川 健吾

# たまねぎ産地の維持・発展

## — 規模拡大と安定経営に向けて —

### 活動事例の要旨

高齢化による離農が増加し、担い手の減少と産地規模の縮小が懸念される中、J Aと連携して全戸アンケート調査による意向確認を行った。その結果、重点支援対象となり得る規模拡大意向者7戸が明らかになった。

規模拡大を目指す担い手の経営安定に向けた支援として、収穫機導入に向けたマルチ早期除去体系試験、べと病薬剤防除体系試験、経営収支計算などを実施した。

結果は部会を通して生産者と関係機関へ周知し、栽培技術の向上や販売先との価格交渉等に活用された。

### 1 活動のねらい・目標

長生地域では白子町を中心にたまねぎ栽培が盛んで、J A長生は平成30年度に「白子たまねぎ®」の商標登録を取得し、販売促進に力を入れている。

主な生産組織として、J A長生を事務局とする「白子町玉葱出荷組合」(105戸)があり、町内の約7割の生産者が加入している。近年、高齢化による規模縮小や離農が増加しており、組合員の今後の意向確認などが急務となっていた。

担い手の規模拡大に向け、収穫機械の導入や、重要病害であるべと病防除対策の確立などが必要となっている。また、J A長生は市況の影響を受けにくい契約販売の割合を増やす意向があり、たまねぎ栽培における費用の把握が求められていた。

### 2 活動の内容

#### (1) 組合員の意向確認

J A長生白子支所、及びJ A長生本所と連携し、個別巡回方式での全戸アンケート調査を実施した。主な内容は、現状の栽培や販売の状況、及び5年後、10年後の見通しなどとした。

#### (2) 担い手の規模拡大・経営安定に向けた支援

##### ア 収穫機導入に向けた栽培試験の実施

当管内はマルチ栽培が主体のため、収穫機の導入が進んでいない。そこで、3月にマルチを早期除去する栽培体系を導入し、収穫機の使用に向けた試験を行った。

##### イ ベと病の薬剤防除体系の検討

散布回数や散布時期、使用する薬剤などの比較試験を行い、効果的なべと病防除体系を検討した。

##### ウ 経営収支計算の実施

栽培体系(手植えと機械植え)ごとの経営収支を試算し、たまねぎ栽培における目標販売価格の検討を支援した。



### 3 活動の成果

#### (1) 全戸アンケート調査結果（実施期間：令和3年10月～令和4年1月）

回収戸数は101戸で、回収率は92%であった。

##### ア 年齢、作業人数、栽培面積について

平均年齢は69.7歳で、57%が70歳以上であった。一方、30歳代は2%、40歳代は3%だった。1戸当たりの平均作業人数（家族）は2.3人で、80%が2人以下だったが、臨時雇用を50%で導入していた。栽培面積の平均は44aで、最大は600aだった。栽培面積の構成は図1のとおりであった。

##### イ 5年後、10年後の意向

今後の栽培面積について、現状維持が69%、縮小が23%、拡大が7%（7戸）であった。

現状～10年後までの面積の推移予想は、表1のとおりである。

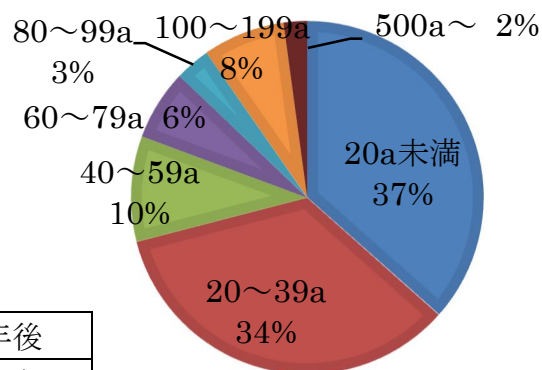


図1 栽培面積の構成割合

表1 現状～10年後までの面積推移予想

	現状	5年後	10年後
戸数	93戸	81戸	74戸
合計面積	4,102a	4,558a	4,859a
1戸平均	44a	56a	66a

規模拡大意向者7戸の10年後までの合計拡大予測面積が13.3haと大きく、産地全体の面積も増加が予想された。しかし、高齢の生産者の多くが10年後も現状維持と回答しているため、実際には予測を下回る可能性もある。

##### ウ 販売の状況

販売先の割合として、JA43%、自家販売27%、直売所15%、地方市場等15%となった。一方、拡大意向者7戸ではJA54%、自家販売27%、直売所3%、地方市場等15%となっており、全体平均と比べてJA出荷の割合が大きくなっている。

##### エ 結果のまとめ

規模拡大意向者7戸は平均年齢54歳と比較的若く、10年後の推定では産地全体の47%を耕作している。JAへの出荷割合も組合平均より高く、JAとしても今後の重点支援対象と位置付け、規模拡大に向けた支援を行っていく。

#### (2) マルチ早期除去体系試験結果

3月25日にマルチを早期除去し（図2）、慣行区と比較した。100玉あたり収量は慣行区22.7kg、除去区25.6kgとなり、懸念された雑草発生も問題とならなかった。

この栽培体系は既に2名の生産者が導入しているが、今回の試験で改めて有効性が確認された。結果を組合の栽培講習会で周知し、機械導入の推進を図った。体系導入済みの1戸では、次作から収穫機の使用を開始することになった。



図2 マルチ除去時の様子

### (3) ベと病薬剤試験結果

3圃場で薬剤防除体系試験を行った。その結果、年内1回、2月1回、3月と4月を2回ずつ、計6回の散布を、計4剤のローテーションで行えば十分に防除可能で、費用対効果も得られると考えられた。

この結果を栽培講習会や個別巡回時に周知したところ、複数の生産者が次作から積極的に導入する意向を示した。

また、JAと一部の生産者からは、水田と作業が競合する3月～4月の散布について、将来的にドローンによる作業委託を導入できないかと提案があった。関係機関と連携して検討を進める。

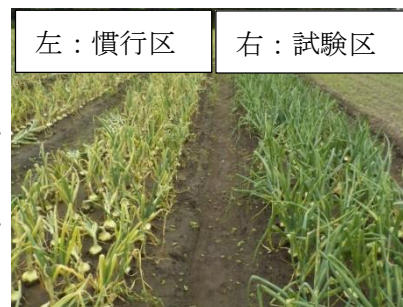


図3 ベと病薬剤試験

### (4) 経営収支計算結果

手植えと機械植え1戸ずつで収支計算を実施した。1袋(10kg)あたりの費用は、手植えで970円、機械植えで917円となった。この結果から、専業農家として十分な所得(たまねぎ栽培面積100a、収量5,000kg/10a、たまねぎでの目標年間所得200万円、を前提条件として試算)を得るには、1,344円/袋程度の販売価格が必要と推定された。結果は出荷組合を通して契約販売先にも提示し、価格交渉の材料の一つとして活用された。

## 4 将来の方向と課題

担い手の規模拡大に向けた支援として、導入が遅れている収穫機を中心とした機械化体系の確立や、一部の生産者で取り組んでいる極早生(または晩生)品種の導入による作期拡大などが求められている。

また、最重要病害であるベと病は、胞子が風で拡散するため、地域全体での防除が必要である。産地としての防除体制の確立に向け、JAなどの関係機関と連携し、ドローン散布による一斉防除などをさらに検討していく。

## 5 担当者 東部グループ 岡崎 遼人

# 小菊の会の活動を通じた栽培技術の向上

## — 直売所出荷する生産者グループ活動への支援 —

### 活動事例の要旨

「小菊の会」は、長生地域で主に小菊を直売所に出荷する生産者の組織で、栽培技術の向上を目指すために、会の活動を行っている。農業事務所では、令和2年度から、さらなる小菊の収量・品質向上を目指すため、以前から会員の間で問題となっている挿し芽及び育苗管理技術や病虫害防除などの講習会、及び全戸巡回等の開催を提案し、指導を行った。また、会員同士が意見交換を行う場を作ることで、技術向上を目指した。

### 1 活動のねらい・目標

長生地域の花き生産者は、小菊やバラなどの切花やシクラメンやポインセチアなどの鉢花が地域に点在している。その中で、小菊を中心として直売所に出荷する生産者で構成される「小菊の会」は会員数が11名で、講習会や全戸ほ場巡回などの活動を行っている。しかし、技術レベルにまだ到達していないこと、生産者の高齢化による会員数が減少していること等により、直売所に出荷する量が減少している。そこで、会員の栽培技術の習得を目指し、活動を行った。

### 2 活動の内容

#### (1) 挿し芽・育苗管理技術の向上

「小菊の会」の生産者の多くは自分自身で挿し芽による育苗を行っているが、管理が難しく、苗の確保が十分ではなかった。そのため、購入苗を利用する生産者が増えた。購入苗は安価ではあるものの、品質が悪く、定植後も病気になりやすく、廃棄ロスも多かった。そこで、農業事務所が会員を対象に栽培講習会の開催を提案し、挿し芽として使う親株の管理から挿し芽・育苗までの栽培管理の方法を指導した。また、挿し芽を行っている会員1名のほ場で挿し芽から育苗管理までの実習を行い、挿し芽・育苗技術の向上を図った。

#### (2) 病虫害防除対策

アザミウマや白さび病などの病虫害の被害による品質低下が問題となっていた。そこで、定期的に病虫害の防除を行うために、以下の取組みを行った。

##### ア 病虫害に関する勉強会及び全戸ほ場巡回の開催

農業事務所が病虫害に関する勉強会の開催を提案し、生産者自身が病虫害を見分けられるように、主な病虫害を写真付きで紹介した。また、会員相互にほ場を巡回し、生育状況や病虫害の発生状況などを確認しながら、意見交換を行った。



写真1 全戸ほ場巡回の様子

## イ 農薬使用履歴の記帳

病害虫の被害による収量、及び品質低下を防ぐため、会員に防除の徹底を指導した。会員全員に対し、薬剤名、散布日等を記帳できる農薬散布履歴シートを配布し、記帳を促した。

### (3) 新規会員の加入促進

「小菊の会」の新規会員の加入促進のため、農業事務所が他に小菊を栽培している生産者、及び小菊の栽培を考えている生産者を洗い出し、直接訪問して会への勧誘を行った。しかし、会の活動内容が不明瞭であったため、加入をためらう生産者もみられた。そこで、会の活動内容を明確にして加入しやすくするため、これまで定められていなかった規約の作成を会員に働きかけた。

## 3 活動の成果

### (1) 挿し芽・育苗管理技術の向上

挿し芽・育苗管理の講習会、及び実習によって各作業の流れを理解することができ、会員の栽培管理技術が向上した。そのため、会員自身で品質の良い苗を十分に確保できるようになった。また、今まで購入苗を利用していた生産者も、良質な苗が今後の生育に重要であることを認識し、自分自身で挿し芽を行う生産者が増えた。



写真2 挿し芽・育苗管理の実習

### (2) 病害虫による被害の軽減

病害虫に関する勉強会を開催した結果、病害虫が発生した際、生産者自身が写真を見て、病害虫の種類を同定し、早期防除ができるようになった。また、全戸ほ場巡回を行い、会員同士で意見交換を行ったことで、病害虫の発生状況をお互いに理解することができた。さらに、農薬使用履歴を記帳したことによって、適期に農薬散布を行うことが習慣化された他、病害虫防除の重要性の理解が進んだ。

### (3) 「小菊の会」会員の増加

農業事務所が規約の作成を会員に働きかけた結果、会長・副会長を中心に規約が作成された。また、以前から小菊を栽培している生産者、及び直売所へ切花を出す予定の生産者に規約を提示しながら勧誘したところ、計2名が「小菊の会」に加入し、計13名と増加した。

## 4 将来の方向と課題

直売所では、お盆や彼岸などの物日になると、切花の需要が増え、品物が不足しているのが現状である。そのため、将来、「小菊の会」の会員を増やすほか、小菊の開花を物日に合わせ、適期販売ができるように、さらなる技術の研鑽を行う必要がある。



写真3 栽培講習会

## 5 担当者 西部グループ 野口 琴未

# 長生地域の青年農業者の育成

## — 長生農業経営体育成セミナーを通じた仲間づくり —

### 活動事例の要旨

これからの長生農業を担う青年農業者を対象に、農業経営者としての資質、能力の向上を図るため、3年間のカリキュラムを通じた優れた農業経営の実態や、実務的な知識・技術の習得等について段階的に学ぶ場として、農業経営体育成セミナーを実施している。

今年度は、農業経営体育成セミナー生 27 名に対し、座学や視察、交流会などを実施し、青年農業者の育成を図った。

### 1 活動のねらい・目標

長生地域では、毎年10名程の新規就農者がいるが、その年齢や経歴は様々である。長生農業独立支援センター経由の新規参入者が多く全体の8割を占めており、他の2割は親元就農であり地域では大規模の農家子弟であることが多い。

そのため早期に主体的農業者として自立できるよう専門的な知識や技術習得だけでなく、同世代の仲間や年齢の近い先輩との交流を通じたネットワークづくりを図った。

### 2 活動の内容

コース別の研修では、農業事務所職員による講義やセミナー生同士のグループワークを実施した。全員を対象とした合同研修では、先輩農業者や他地域の青年農業者との交流会、視察研修等を行った。

表1 コース別研修の実施内容

研修名	実施内容
基本研修 (1年目) 3回 25名参加	・農薬使用、土壌肥料、販売・流通に関する知識の習得
	・グループワークによる農薬、土壌肥料、販売・流通に関する情報共有
専門研修 (2年目) 4回 11名参加	・土壌肥料、制度資金、GAP、販売・流通に関する知識の習得
	・グループワークによる土壌肥料、制度資金、販売・流通に関する情報共有
	・プロジェクト学習の実施支援
総合研修 (3年目) 5回 12名参加	・制度資金、ライフプラン、経営、販売・流通に関する知識の習得
	・グループワークによる制度資金、販売・流通、経営に関する情報共有
	・営農計画作成の支援

表2 合同研修の実施内容

研修名	実施内容
合同研修 7回 49名参加	・地域の先輩農業者（YPC※）との交流会
	・作物専門研修
	・夷隅農業経営体育成セミナー生との相互視察
	・農業Weekの合同視察
	・関東ブロック農村青少年（4H）クラブプロジェクト実績発表会
	・千葉県青年農業者会議
	・プロジェクト等発表会

※8名の若手農業者からなる農業青年団体であるヤングパワーズクラブの略称。



写真1 基本生のオリエンテーション



写真2 相互視察（夷隅と合同）

### 3 活動の成果

今年度は、基本生12名、専門生8名、総合生7名が参加した。研修を通じて、基本生は土壌肥料や農薬等の農業の基礎的知識の習得、専門生は土壌肥料、資金制度、農業安全・GAP等の専門知識の習得、総合生は経営収支やライフプラン等経営管理能力の向上が図られた。

また、合同セミナーによる視察や各セミナーでグループワークを多く取り入れたことによりセミナー生同士が積極的に意見交換することができた。参加したセミナー生からは「同年代の農業者と情報交換をすることができてよかった」「親元就農と独立就農と様々な価値観を持った人がいるので面白かった」「普段作業しているなかでは見ることのできない作目について知ることができた」等の感想があった。

### 4 将来の方向と課題

長生地域では長生農業独立支援センター経由の新規参加者が年々多くなっており、「情報交換ができる仲間をつくりたい」「様々な品目の視察をしたい」などセミナー生から要望されていることから、次年度以降の農業経営体育成セミナーの更なる検討を行い、セミナー生自身の仲間づくりにつなげていく。

### 5 担当者 東部グループ 中原 祐樹

# 水稻での家畜ふんたい肥の利用

## — 飼料用米栽培でのコスト低減化 —

### 1 活動の背景・ねらい

米の需要が低下している中で、主食用米から飼料用米への作付転換が進んでいる。飼料用米の生産では、多収を目指すため多くの肥料を使用する必要がある、肥料のコストが上昇している中で経営を圧迫している。

そこで、鶏ふん堆肥を飼料用米栽培の基肥一部代替とした栽培体系を確立することで、化学肥料使用減を目指した。

### 2 活動の内容

#### (1) ほ場概要・栽培概況

ア 設置場所：長生郡長生村信友地先  
試験区 30a 2 ほ場  
(基肥 30%代替区) (基肥 60%代替区)

慣行区 25a 1 ほ場

イ 栽培品種：アキヒカリ

ウ 施用量



写真 散布機による鶏ふん堆肥の散布

	基肥			追肥			合計成分量 N-P-K (kg/10a)
	月 日	肥料名 (N-P-K:%)	施用量 (kg/10a)	月 日	肥料名 (N-P-K:%)	施用量 (kg/10a)	
慣行区	5月3日	早生用一発 (26-10-10)	45	6月2日 6月21日 7月7日	硫安(1.5-0-0) 尿素(2.3-0-0) 尿素(2.3-0-0)	7 5 5	17.8-4.5- 4.5
30%代 替区	3月14日 5月3日	鶏ふん堆肥 (0.78-5.14-3.24) 早生用一発 (26-10-10)	250 30	6月2日 6月21日 7月7日	硫安(1.5-0-0) 尿素(2.3-0-0) 尿素(2.3-0-0)	7 5 5	15.8-15.9- 11.1
60%代 替区	3月14日 5月3日	鶏ふん堆肥 (0.78-5.14-3.24) 早生用一発 (26-10-10)	500 15	6月2日 6月21日 7月7日	硫安(1.5-0-0) 尿素(2.3-0-0) 尿素(2.3-0-0)	7 5 5	13.9-27.2- 17.7

・堆肥成分表 (分析機関：千葉県農林総合研究センター、2021年10月)

分析項目	窒素 全量	りん酸 全量	加里 全量	石灰 全量	苦土 全量	炭素 全量	C/N比	水分	p h
分析値	1.81%	6.43%	3.6%	22.4%	1.75%	14.6%	8.1	22.1%	9.4

※分析値より有効成分量(化学肥料に相当する効果が見込める量)を換算した。

#### (2) 生育状況

##### ア 生育ステージ

	は種日	移植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期	収穫日
慣行区	4月9日	5月3日	6月21日	7月12日	8月21日	8月30日
30%区			6月22日	7月11日		
60%区						

## イ 生育状況調査結果

出穂後調査 【調査日：7月27日】

	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/株)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD値)
慣行区	86	18.4	28.7	459.2	41.5
30%区	83	17.3	26.0	408.2	40.6
60%区	81	18.1	24.8	401.8	39.9

## ウ 収量・収量構成要素調査

(ア) 収量調査 (kg/10a)

	全重	籾重	精玄米重	屑米重	収量 (精玄米重+屑米重)	農家 実収
慣行区	1624	718	692	35	727	682
30%区	1555	702	677	13	690	
60%区	1464	817	642	15	657	

※精玄米重、屑米重、収量は玄米水分15%で計算。

(イ) 収量構成要素調査

	m <sup>2</sup> 当 り穂数	1穂 籾数	m <sup>2</sup> 当 り籾数	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 ※(g)	計算収量※ (Kg/10a)
慣行区	459	83.9	38,500	73.5	22.1	627.2
30%区	408	76.0	31,000	85.6	21.9	582.2
60%区	401	78.1	31,300	82.0	22.3	572.5

※玄米千粒重、計算収量は玄米水分15%で計算。

## エ 結果と考察

草丈、稈長及び茎数、穂数の生育は、慣行区>30%区>60%区の順となったが、生育ステージは同様となった。

坪刈り収量調査では、慣行区が実収量より45kg良く、基肥30%代替区では実収量より-8kg、基肥60%代替区では全収量で-25kgとなった。

これは、慣行区と比べて穂数及び一穂籾数が少ないためである。しかし、登熟歩合は高く、玄米千粒重は慣行区と比べて、30%区でやや小粒となり、60%区でやや大粒となった。

今回の試験で使用した鶏ふん堆肥は、取りに行けば無料で手に入るものを使用し、そのため肥料コスト面では、基肥30%代替区で3,234円(肥料1袋分)、60%代替区で6,468円(肥料2袋分)の削減となったが、堆肥等の経費を加えると所得の向上とならなかった。

### 3 今後の取組と課題について

基肥の30%程度を鶏ふん堆肥で代替することが、コスト面と収量面のバランスが良く、導入実現性が高いと考えられる。

しかしながら、品質の安定した堆肥を近場で確保や堆肥の輸送方法や費用、散布方法や散布機の購入費用などをどう考えるか。正確な施肥量の把握や計画し、散布の時期による肥料効果発現の違いがどの程度か、その年の気候(温度)によつての肥料効果発現の違いに課題がある。

### 4 担当者 東部グループ 佐藤 龍一、西部グループ 塩入 貞雄



# ねぎの契約出荷に適した株間の検討

## — 簡易規格の活用促進 —

### 1 活動の背景・ねらい

J A長生では、平成27年に設置したねぎ出荷調製施設で出荷調製の受託を行い、生産者の負担を減らす取組を行ってきた。令和3年度からは出荷調製施設の運営改善のために、簡易規格による契約出荷を行うこととし、定数詰めから定量詰めに出荷方法が変わったため、契約出荷向けの栽培方法の確立が必要となった。

そのため、面積当たりの重量が最もとれる株間について試験を行った。

### 2 活動の内容

#### (1) 株間の違いによる重量差の確認

##### ア 試験概要

1穴3粒まき、VP100B(みのる産業(株))により定植株間を変えて試験を行った。

試験区：6.5cm区、7.1cm区、7.6cm区、7.9cm区、8.2cm区、9.0cm区を設置

播種日 3/3、定植日：5/29、収穫調査日：11/18

##### イ 結果

表1 各区の収穫本数、重量、1本重平均

	収穫本数(本)					重量(kg)					1本重平均(g)
	A太	A中	A細	B	計	A太	A中	A細	B	計	
6.5cm区	0	26	16	1	43	0	3.92	1.81	0.05	5.78	134
7.1cm区	3	33	2	0	38	0.61	4.98	0.16	0	5.75	151
7.6cm区	1	30	2	0	33	0.23	4.88	0.24	0	5.35	162
7.9cm区	8	23	0	0	31	1.58	3.68	0	0	5.26	170
8.2cm区	9	21	0	2	32	1.75	3.49	0	0.16	5.40	169
9.0cm区	12	14	0	0	26	2.42	2.53	0	0	4.95	190

- ・株間が大きくなる程、1本あたりの重量、A太の割合が大きくなる傾向であった。
- ・面積当たりの重量は6.5cm区が一番大きくなった。
- ・6.5cm区では規格の中でも細いものが多く出た。  
そのため、生育が悪い年には規格外品が増える可能性が高い。



写真1 : 9.0 cm区



写真2 : 8.2 cm区



写真3 : 7.9 cm区



写真4 : 7.6 cm区



写真5 : 7.1 cm区



写真6 : 6.5 cm区

上記の結果から、今回の試験結果では 7.1 cm区で植えることが面積当たりの重量が取れ、規格外品が出るリスクが抑えられると考えられる。

また、重量は定植本数よりも収穫本数との関係が強いため、育苗時の欠株や夏越しによる欠株を考慮し、35~40 本/m の収穫本数になるよう植え付けることで、面積当たり重量が期待できる。

### 3 今後の取組

試験結果を調製施設利用者に周知し、適正株間での植付を推奨する。

### 4 担当者 西部グループ 白井 温

# 稲WCS生産コントラクターのゆとりある収穫作業に向けて

## — 早生型稲WCS専用品種「つきはやか」の取組 —

### 1 活動の背景・ねらい

長生地域では主食用米の収穫作業と競合しないよう、その前後に稲WCSを収穫している。7月下旬から、主食用早生品種「ふさおとめ」を稲WCSとして収穫しているが、天候の影響で収穫が遅れた場合の品質低下が懸念されるため、作業のゆとりが確保できない状況にあった。そこで、作業分散を図るために早生型稲WCS専用品種「つきはやか」の試験栽培に取り組んだ。

### 2 活動の内容

#### (1) 調査内容

長生村にて、「つきはやか」と、対照として「ふさおとめ」の栽培調査及び稲WCS利用状況調査を実施した。栽培調査では栽培管理状況、生育状況、収穫量、また稲WCS利用状況調査では飼料品質、家畜の嗜好性乳質への影響について調査した。また、コントラクターに収穫作業分散の効果について聞き取りした。



写真 「つきはやか」収穫の様子

#### (2) 調査結果

「つきはやか」は「ふさおとめ」と同日に移植し、出穂期は15日遅くなった。収穫は「ふさおとめ」より10日遅い8月2日に行い、主食用米の収穫時期より前に収穫可能であった。また、ロール数は、「ふさおとめ」より2ロール多かった。飼料品質、嗜好性や乳質は適正值の範囲内であり、問題なかった。

#### (3) コントラクターへの聞き取り

コントラクターの聞き取りでは、「つきはやか」に取り組んだことにより労働力の分散ができ、作業のゆとりが確保できただけでなく、収量も向上したため来年度も同様に取り組んでいきたいとの話であった。以上から、「ふさおとめ」の一部を「つきはやか」に変えることで、収穫作業分散によるゆとりの確保と収量増加や品質向上が期待でき、「つきはやか」は今後の普及性があると考えられた。

表 「つきはやか」の調査結果

品種	移植日	出穂期	収穫日	ロール数/10a	嗜好性	乳質への影響
つきはやか	4月16日	7月22日	8月2日	9個	良好	問題無
ふさおとめ		7月7日	7月23日	7個	良好	問題無

### 3 今後の取組

今後は「ふさおとめ」を「つきはやか」に代替可能な上限面積について聞き取り調査を行い、コントラクターのゆとりの確保と収量増加に寄与していく。

### 4 担当者 東部グループ 中原、佐藤、西部グループ 塩入、佐川

# 「長生トマト」の販売力アップに向けて

## ― 市場への聞き取りや他産地視察の取組 ―

### 1 活動の背景・ねらい

長生地域では、白子町、長生村、一宮町を中心に大玉トマトの生産が盛んである。生産者の多くはJ Aの選果場から卸売市場へ出荷している。近年、トマト単価は低迷しており、産地維持のためには規模拡大や単収の増加に加えて、市場のニーズを踏まえた品質改善が重要である。そこで、「長生トマト」の販売力向上に向けた情報収集を目的に、市場への聞き取り調査や他産地の選果場の視察を行った。

### 2 活動の内容

#### (1) 市場流通動向の調査

J A長生及び農業事務所が東京青果株式会社を訪問し、トマトの市場流通動向に関する聞き取り調査を行った。スーパー等の実需者はトマトに求める品質として、色揃いや棚持ちを重要視する傾向があり、近年伸びている産地では、これらの品質管理を徹底した上で、一定数量を計画的に市場へ出荷していることがわかった。

#### (2) 他産地のトマト選果場視察

生産者8名、J A長生、全農ちば及び農業事務所、J Aしもつけ栃木地区トマト選果場を視察した。当該選果場では、計画出荷のため、生産者を複数の班に分けて出荷日を指定していた。毎日出荷できないため、収穫時に色を揃えるのが難しくなるが、各戸での目合わせやJ Aによる個別指導等により統一を図っていた。長生地域の生産者及び関係機関が他産地での取組事例を共有し、品質や出荷量の管理に産地として協力して取組むことへの意識が高まった。

視察結果は養液・長段部会で報告し、生産者の提案により、J A長生の選果場にて色の目合わせ会を実施した。目安としているカラーナンバーや色のばらつき等をお互いに確認し、出荷時の色揃いへの意識統一を図った。



写真 出荷されたトマト（左）  
目合わせを行う生産者（右）

### 3 今後の取組

出荷時の色揃いや正確な出荷数量把握等、販売力向上に向けた「長生トマト」の課題について部会を通じて検討していく。

### 4 担当者 東部グループ 牧野 健太 、富田 成美

# 「幸水」の適期管理による収量の維持

— 「ながいき梨」の大玉生産・出荷をめざして —

## 1 活動の背景・ねらい

一宮・岬梨組合の一宮地区は、「幸水」の簡易被覆（雨除け）栽培により県内で最も出荷が早い産地であるとともに、安定・均一な品質が、市場からの信頼を得ている。一方で、市場からは2L以上の大玉出荷と出荷量の維持が産地に求められている。

そこで、定期的な玉伸び調査や講習会を通して適期管理の徹底等の生産技術指導を行った。

## 2 活動の内容

### (1) 「幸水」の適期管理及び着果数指導

「幸水」の大玉生産・出荷を目指して摘果、新梢管理、秋の枝抜き、せん定等の技術資料を作成し、講習会の場で指導を行った。また、実技については、農林総合研究センターの職員と連携して指導を行った。



写真 せん定講習会の様子

### (2) 「幸水」の果径調査

5月10日から7月20日まで10日毎に組合で果径調査を行った。今年度は気候の影響により小玉傾向となっていたため、講習会の場で生産者へ早めの摘果作業の実施や新梢管理の実施を促した。

その結果、5月20日時点では露地の「幸水」で平年の92.4%の果実肥大であったものの、適切な管理により7月20日時点では97.9%の大きさまで回復し、当初の予測よりも小玉傾向の解消が図れた。

### (3) 女性及び若手生産者に向けた栽培指導

新規就農予定者を含む女性及び若手生産者を対象に新梢管理、秋の枝抜き、せん定について重点的に指導を行った。また、若手生産者とともに圃場巡回を行い、果実の肥大状況や新梢の多少、病虫害の有無などを確認し、技術向上を図った。

## 3 今後の取組

大玉果実を生産するためには、適期に花芽整理、摘果、新梢管理を行い、貯蔵養分の浪費や果実と新梢との養分競合を防ぐことが重要であるため、年間を通じた早めの管理作業体系を徹底させる必要がある。また、来春より就農予定の新規就農者がいるので、これらの管理方法の指導を行い、自力で年間を通じた作業ができ、大玉生産に繋がるように支援を行う。

## 4 担当者 東部グループ 小野瀬 優哉

# 観光・直売いちごの経営力向上

— 「長生いちご研究会」の活動を通して —

## 1 活動の背景・ねらい

長生地区にはいちご農家が13戸あるが、販売についてはそれぞれが独自に観光いちご狩りや直売を行っている。そのため、出荷組合が無く、生産者が孤立しがちである。そこで、当地区では学習研究組織「長生いちご研究会」（以下、研究会）を13戸中9戸で組織し、県いちご連にも加入して情報交換や交流を行っている。近年、コロナ禍によりほぼ活動停止状態であったが、今年度は、感染防止に努めながら、研究会の活動を通して栽培技術、販売力の向上、新規就農者の定着支援等を行った。

## 2 活動の内容

### (1) 相互ほ場巡回の実施

農薬メーカーと連携しながら、重要病害である炭そ病対策、被害の大きいハダニ類、アザミウマ類などの微小病害虫対策としての天敵利用等について指導を行った。このことにより、特に天敵の利用方法の理解が進み、育苗時期からの導入や複数種の天敵を導入する農家が増え、効果も上がっている。また、いちご狩りに向けて県いちご連が策定した新型コロナ対策を共有し、それぞれの経営の中でとれる対策を実施して、地区全体で安心安全ないちご狩りをアピールできるよう支援した。



写真 相互ほ場巡回の様子

### (2) 花芽分化検鏡会の実施

9月に花芽分化検鏡会を実施した。参加した農家のほか、一部参加していない農家にも検鏡結果を伝えて、適期定植を支援した。

### (3) 新規就農者の定着支援

年度当初に過去3年以内の新規就農者に研究会への加入を呼びかけたところ、2戸の新規参加者が加入した。巡回では先輩農家から助言が行われるなど、交流を深めることが出来た。

## 3 今後の取組

引き続き研究会未加入者、新規就農者の研究会加入や、会員相互の交流を促進して、地区全体の栽培技術、販売力の向上を支援する。

## 4 担当者 西部グループ 本居 真一

# 労務管理、人材育成、経営継承等の支援による経営改善の取組

## — 中小企業診断士等との連携による高度な経営課題の解決 —

### 1 活動の背景・ねらい

農業を取り巻く環境が大きく変化する中、農業経営の課題は多様化、高度化が進み、その対応には経営や法律に関する専門知識が不可欠になってきている。特に長生地域では法人や個人を問わず、労務管理や雇用者等の人材育成、円滑な経営継承、財務改善などを課題とする農業者が多くなっている。このため、農業事務所では県の経営サポート事業を活用し、中小企業診断士、社会保険労務士、税理士等の専門家との連携により、本事業を希望した農業者の経営支援に取り組んだ。

### 2 活動の内容

#### (1) 支援対象の経営体

昨年度から継続して専門家を派遣している重点指導農業者4戸に、今年度新規で派遣し始めた同農業者3戸を加え、計7戸が対象となった。いずれも、経営継承や相続、雇用管理や就業環境の改善、財務改善など、解決に専門的な知識やノウハウが必要な課題を持っていた。

#### (2) 専門家との連携

新規の重点指導農業者については、まずコーディネーターである中小企業診断士による経営診断が行われ、課題に適した専門家が選定・派遣される。農業事務所は各専門家と一緒に重点指導農業者を訪問し、専門家のヒアリングや助言を聞きながら、専門家が使う専門用語の理解を補助したり、農業者が経営状況の説明に苦慮している場合に情報の補足を行うなど、両者の円滑なコミュニケーションを促した。

また、専門家から宿題が出される場合、農業事務所は次回の派遣までに情報を整理して資料を作成したり、農業者が考えを整理するための助言を行った。

このような専門家との伴走型支援という形を取りながら、限られた派遣回数の中、農業者の課題解決を1歩ずつ進めた。

### 3 今後の取組

対象経営体の課題は単年度では解決できないため、次年度も専門家と連携しながら支援を継続していく。また、今年度の重点指導農業者以外にも、同様の課題を抱える経営体が見受けられるが、経営者自身の問題意識が十分でなく、積極的な課題解決への意欲が醸成されていない場合には、プッシュ型の活動により、動機付けや課題抽出にも取り組む必要がある。

### 4 担当者 西部グループ 高橋 大樹

表 令和4年度の重点指導農業者

重点指導農業者	個・法	主な相談内容	新規／継続	※専門家の種類
A氏	個人	経営継承・相続	継続	診
B氏	個人	経営継承・相続	継続	税、診
C氏	個人	雇用・労務	継続	診、社
D氏	個人	財務・事業戦略	新規	診
E法人	法人	雇用・労務	継続	診、社
F法人	法人	雇用・労務	新規	診、社
G法人	法人	雇用・労務	新規	診、社

\*診：中小企業診断士、税：税理士、社：社会保険労務士

(一般情報)

## ねぎ栽培者向け排水対策実演会

長生農業事務所改良普及課 令和4年5月31日発

管内のねぎにおいては、近年の集中豪雨により、湿害による生育不良やほ場作業の遅延が発生しており、排水対策の必要性が高まっています。そこで、長生農業事務所では JA 長生本納蔬菜部研究部会、(株)クボタ、クボタアグリサービス(株)の協力を得て、ねぎ生産者向けに、30馬力程度のトラクターで簡易に施工が可能な排水対策(溝堀機、サブソイラー、カットドレーン)の実演会を開催しました。

当日は機械の扱っただけでなく、排水対策の基本的な考え方についても農業事務所から説明をしました。参加者からは「実演機は何m間隔で施工するのか?」「地下水位の高いほ場ではどのような排水対策が効果的なのか?」等多くの質問が上がりました。

長生農業事務所では、今後も生産上の課題解決を支援しながら、ねぎ産地の振興に取り組んでいきます。



カットドレーンによる暗渠設置の実演



## インボイス制度が農業経営に与える影響を学ぶ

～農業経営研修会の開催～

長生農業事務所改良普及課 令和5年1月11日発

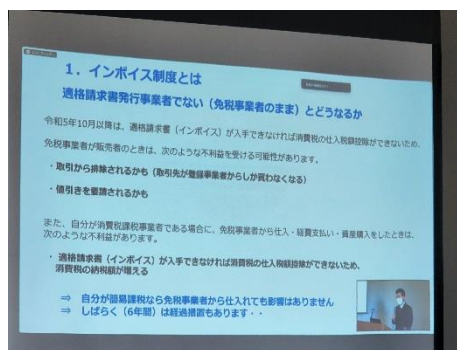
令和5年10月からインボイス制度が始まります。長生地域は、直売など系統販売以外の販路を持つ経営体や、農事組合法人の集落営農組織等が多く、制度の影響を受ける可能性があります。そこで長生農業事務所では、令和4年12月19日、小野寺浩一公認会計士税理士事務所の小野寺先生を講師として、研修会を開催しました。

会場参加とオンラインでのライブ配信を併用したところ、会場14名、オンライン9名の参加がありました。講演では、消費税の仕組み、インボイス制度の概要、農業における様々な特例などが丁寧に解説されました。参加者からは「今まで全く知識がなかったが今後の課題が見えてきた」「これまでで一番わかりやすかった」との感想がありました。

農業事務所では、次年度も農業経営の課題解決につながる研修会を開催し、農業者の経営発展を支援していきます。



講義中の様子



講義画面（オンラインでのライブ配信）

(一般情報)

## 「長生農業フォーラム 2022」を開催

長生農業事務所改良普及課 令和5年1月24日発

1月16日、白子町青少年センターにおいて、長生地区指導農業士会等の関係5団体と農業事務所の共催により「長生農業フォーラム 2022」を開催し、長生地域の農業者、関係機関等159名が参加しました。

今年度は、「イノベーションで拓く明日一次世代の農業予想図一」というテーマのもと、全国農業協同組合連合会から肥料原料の情勢について、株式会社クボタからスマート技術を活用したこれからの農業について講演をいただきました。また、長生地域の事例紹介として、長生農業独立支援センターから新規就農者支援の取り組みについてと、白子町で新規就農した女性農業者による就農の経緯等についての発表がありました。会場からは活発に質問や意見があり、活気あるフォーラムとなりました。農業事務所では、今後もフォーラム等の開催を通して地域農業の活性化を図ります。



講演の様子



熱心に聞き入る会場

## 主な出来事

日時	内 容	場 所	参加者数
令和4年4月7日	J A 長生施設野菜部会 春期トマト共進会	J A グリーンウェーブ長生、及び各圃場	15
4月8日	白子町玉葱出荷組合 葉ニンニク出荷反省会	J A 長生白子選果場	10
4月15日	J A 長生施設野菜部会 養液・長段トマト部合同役員会	J A グリーンウェーブ長生	8
4月18日	白子町玉葱出荷組合 タマネギ機械選出荷会議	J A 長生白子支所	20
4月20日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
4月20日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン役員圃場・試験圃場巡回	一宮町	9
4月21日	長柄町ニンニク生産組合講習会	J A 長生日吉支所	9
4月21日	J A 長生施設野菜部会 青年部販売促進会	千葉県庁生協	6
4月21日	梨なびアプリの使用法に関する講習会	一宮町保健センター	11
4月22日	J A 長生施設野菜部会 抑制トマト部会議	J A グリーンウェーブ長生	12
4月26日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト部会議	J A グリーンウェーブ長生	12
4月28日	農事組合法人長生産直トマト部ほ場巡回	白子町・茂原市	8
5月2日	白子町玉葱出荷組合 タマネギ出荷査定会	J A 長生白子支所	28
5月6日	白子町玉葱出荷組合 葉タマネギ出荷反省会	J A 長生白子選果場	7
5月6日	一宮・岬梨組合 摘果講習会	いすみ市	47
5月6日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン全戸巡回	一宮町	27
5月9日	J A 長生施設野菜部会 養液中部支部全戸巡回	白子町	12
5月11日	J A 長生施設野菜部会 養液北部支部全戸巡回	白子町	15
5月11日	カットドレイン実演会	茂原市	20
5月12日	長南町露地野菜出荷組合ソラマメ査定会	J A 長生長南支所	10
5月12日	J A 長生施設野菜部会 養液南部支部全戸巡回	一宮町・長生村	16
5月19日	長生村農業技術連絡会議	長生村役場	17

日 時	内 容	場 所	参加者数
5月19日	J A 長生水稲育苗担当者反省会	J A 長生本所	8
5月20日	長柄町露地野菜生産組合ほ場巡回・栽培講習会	J A 長生日吉支所	10
5月23日	J A 長生 農業塾ねぎコース	長生村	16
5月24日	J A 長生施設野菜部会 長段トマト部共進会	一宮町・長生村・白子町	15
5月24日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン全戸巡回	一宮町	27
5月27日	令和3年産ねぎ反省会	茂原市	20
5月27日	長生農業研究会第1回役員会	長生合同庁舎会議室	9
5月29日	第39回長夷ブラックアンドホワイトショウ	千葉県立茂原樟陽高校	140
5月30日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
5月31日	経営体育成セミナー開講式	長生合同庁舎	16
6月2日	一宮・岬梨組合 緑枝管理講習会	一宮町	45
6月2日	J A 長生施設野菜部会 抑制キュウリ部会議	J A グリーンウェーブ長生	8
6月6日	J A 長生施設野菜部会 規模拡大・建替意向者会議	J A グリーンウェーブ長生	10
6月6日	長生いちじく研究会総会	長生合同庁舎	9
6月7日	長南町蓮根組合視察研修会	茨城県土浦市	12
6月9日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン全体会議	J A グリーンウェーブ長生	24
6月9日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト反省会	J A グリーンウェーブ長生	30
6月10日	J A 長生施設野菜部会 抑制トマト部生産班会議	J A グリーンウェーブ長生	8
6月14日	J A 長生施設野菜部会 全農ちばロックウール転換者ほ場巡回	白子町	9
6月15日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト生産班会議	J A グリーンウェーブ長生	15
6月16日	J A 長生施設野菜部会 サカタのタネ かれん栽培講習会	J A グリーンウェーブ長生	16
6月18日	産直広場太陽出荷者総会	長柄町公民館	50
6月20日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン査定会	J A グリーンウェーブ長生	28

日 時	内 容	場 所	参加者数
6月20日	長生村稲作研究会ほ場巡回	長生村役場、現地ほ場	12
6月21日	一宮・岬梨組合 鳥獣害対策講習会	J Aグリーンウェーブ長生	22
6月22日	令和4年度女性梨栽培技術講習会 第1回緑枝管理研修	いすみ市	6
6月24日	小菊の会圃場巡回	長生村、長南町、長柄町	13
6月27日	J A長生農産物共進会（アールスメロン）	J Aグリーンウェーブ長生	17
6月28日	小菊の会圃場巡回	茂原市	12
6月28日	J A長生施設野菜部会 抑制トマト栽培講習会	J Aグリーンウェーブ長生	25
6月29日	J A長生 農業塾ねぎコース	長生村	15
6月29日	J A長生北部営農購買センター生産振興会議	J A長生白子支所	10
6月29日	J A長生施設野菜部会 春期トマト生産班会議	J Aグリーンウェーブ長生	12
6月30日	長南町蓮根組合ほ場巡回	長南町	15
7月4日	長南町露地野菜出荷組合役員会	J A長生長南支所	7
7月4日	J A長生施設野菜部会 アールスメロン試験品種検討会（1回目）	J Aグリーンウェーブ長生	7
7月5日	経営体育成セミナー専門研修（土壌肥料）	長生合同庁舎	6
7月5日	経営体育成セミナー総合研修（我が家の経営史について）	長生合同庁舎	3
7月8日	J A長生施設野菜部会 抑制キュウリ部生産班会議	J Aグリーンウェーブ長生	8
7月10日	経営体育成セミナー基本研修（病害虫防除）	長生合同庁舎	10
7月12日	J A長生施設野菜部会 全農ちばロックウール転換者ほ場巡回	白子町	9
7月13、20、23日 8月3日	水稲採種ほ ほ場審査	長南町	32
7月13日	J A長生施設野菜部会 アールスメロン試験品種検討会（2回目）	J Aグリーンウェーブ長生	7
7月14日	一宮町野菜出荷組合 青年部デルフィー栽培講習会	一宮町	10
7月15日	長南町露地野菜出荷組合総会	J A長生長南支所	13
7月20日	長生いちご研究会ほ場巡回	茂原市、一宮町	10

日 時	内 容	場 所	参加者数
7月21日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト栽培講習会	J A グリーンウェーブ長生	20
7月22日	農山漁村男女共同参画長生地区推進会議	長生合同庁舎	11
7月22日	男女共同参画地域セミナー	長生合同庁舎	11
7月22日	令和4年産ながいき梨「幸水」査定会	J A グリーンウェーブ長生	63
7月22日	長生農業研究会通常総会(書面決議)		8
7月28日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
8月1日	長柄町ニンニク生産組合反省会	J A 長生日吉支所	9
8月3日	女性農業者農作業安全研修会	長生合同庁舎	8
8月3日	令和4年度農産物共進会	J A グリーンウェーブ長生	12
8月4日	睦沢町甘藷生産組合ほ場巡回	睦沢町、長生村、一宮町	18
8月8日	ちばエコ米ほ場巡回	茂原市、長南町、白子町	8
8月9日	J A 長生施設野菜部会 全農ちばロックウール転換者ほ場巡回	白子町	9
8月15日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
8月17日	農事組合法人長生産直トマト部ほ場巡回	白子町・茂原市	8
8月18日	J A 長生施設野菜部会 白子北部支部全戸ほ場巡回	白子町	9
8月23日	長生いちご研究会ほ場巡回	茂原市、長生村、一宮町	9
8月23日	経営体育成セミナー合同研修(夷隅相互訪問)	いすみ市	9
8月24日	J A 長生施設野菜部会 白子中部支部全戸ほ場巡回	白子町	9
8月26日	J A 長生施設野菜部会 長生支部全戸ほ場巡回	長生村	8
8月29日	J A 長生施設野菜部会 春期トマト反省会	J A グリーンウェーブ長生	16
9月5日	一宮町野菜出荷組合 青年部デルフィー栽培講習会	一宮町	10
9月7日	J A 長生 農業塾ねぎコース	長生村	12
9月8日	J A 長生施設野菜部会 抑制キュウリ査定会	J A グリーンウェーブ長生	24

日 時	内 容	場 所	参加者数
9月15日	J A 長生施設野菜部会 全農ちばロックウール転換者ほ場巡回	白子町	9
9月21日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト部全戸巡回	一宮町	26
9月22日	経営体育成セミナー専門・総合研修（資金）	長生合同庁舎	7
9月27日	J A 長生施設野菜部会 白子北部支部全戸ほ場巡回	白子町	9
9月28日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
9月29日	睦沢町甘藷生産組合試し掘り	睦沢町、長生村、一宮町	21
9月29日	J A 長生施設野菜部会 長生支部全戸ほ場巡回	長生村	8
9月30日	経営体育成セミナー総合研修（ライフプラン）	長生合同庁舎	4
9月30日	J A 長生施設野菜部会 白子中部支部全戸ほ場巡回	白子町	9
10月3日	経営体育成セミナー稲作専門研修	長生合同庁舎	3
10月3日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン反省会	J A グリーンウェーブ長生	23
10月7日	白子町玉葱出荷組合 タマネギ生協販売会議	J A 長生白子支所	18
10月11日	土地改良事業「両総松潟支線」推進協議会 (一宮町)	一宮町役場	13
10月12日	一宮・岬梨組合研究部 秋の枝抜き講習会	いすみ市	12
10月13日	J A 長生施設野菜部会 長生トマトを考える会	J A グリーンウェーブ長生	20
10月13日	土地改良事業「両総松潟支線」推進協議会 (白子町、長生村)	白子町役場、長生村役場	12
10月14日	(農)七渡営農組合総会	茂原市 七渡営農組合ライスセンター	18
10月14日	経営体育成セミナー合同研修（管外視察：農業week）	幕張メッセ	9
10月19日	J A 長生 農業塾ねぎコース	長生村	10
10月19日	J A 長生施設野菜部会 養液北部支部全戸巡回	白子町	15
10月20日	一宮町野菜出荷組合 青年部デルフィー栽培講習会	一宮町	10
10月20日	J A 長生施設野菜部会 越冬期トマト目揃い会	J A グリーンウェーブ長生	38
10月21日	J A 長生施設野菜部会 養液南部支部全戸巡回	一宮町・長生村	16

日 時	内 容	場 所	参加者数
10月24日	白子町玉葱出荷組合 タマネギ栽培講習会	J A 長生白子支所	30
10月25日	J A 長生施設野菜部会 養液中部支部全戸巡回	白子町	12
10月26日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト部全戸巡回	一宮町	25
10月27日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、長生村、一宮町	11
10月27日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
10月28日	長南町露地野菜出荷組合ほ場巡回、講習会	長南町	10
10月28日	小菊の会反省会	長生合同庁舎	9
10月28日	J A 長生施設野菜部会 養液・長段トマト部合同役員会	J A グリーンウェーブ長生	8
11月2日	令和4年産「ながいき梨」生産・出荷反省会	J A グリーンウェーブ長生	30
11月7日	長生WCS生産出荷協議会臨時総会	長生村	20
11月9日	J A 長生施設野菜部会 栃木県視察研修	J A しもつけ管内	13
11月10日	J A 長生施設野菜部会 春トマト栽培講習会	J A グリーンウェーブ長生	25
11月11日	長生農業研究会第2回役員会	長生合同庁舎会議室	8
11月11日	経営体育成セミナー合同研修（夷隅相互訪問）	長生村、長南町	11
11月11日	長生農業研究会第2回役員会	長生合同庁舎会議室	8
11月15日	長南町農業技術者連絡協議会	長南町役場	14
11月15日	令和4年産秋冬・春ねぎ販売会議・査定会	茂原市	100
11月15日	長南町農業技術者連絡協議会	長南町	14
11月15日	J A 長生施設野菜部会 長段トマト部全戸ほ場巡回	一宮町・長生村・白子町	17
11月16日	長生農業フォーラム2022	白子町青少年センター	159
11月17日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、長生村、一宮町	12
11月21日	白子町玉葱出荷組合 葉ニンニク全戸ほ場巡回	白子町・茂原市	11
11月22日	J A 長生施設野菜部会 全農ちばロックワール転換者ほ場巡回	白子町	9



日 時	内 容	場 所	参加者数
11月24、25日	長生地区指導農業士会県外視察研修会	静岡県沼津市	7
11月24日	J A 長生 農業塾ねぎコース	長生村	15
11月24日	一宮町稲作研究会総会	一宮町役場	8
11月25日	長南町運根組合共進会、目揃え会	J A 長生長南支所	18
11月25日	J A 長生施設野菜部会 アールスメロン部全体会議	J A グリーンウェーブ長生	23
11月30日	J A 長生北部営農購買センター生産振興会議	J A 長生白子支所	10
11月30日	一宮町野菜出荷組合 青年部デルフィー栽培講習会	一宮町	10
12月1日	長生農業研究会臨時総会(書面決議)		8
12月2日	J A 長生施設野菜部会 青年部栽培講習会	J A グリーンウェーブ長生	12
12月5日	経営体育成セミナー専門研修 (GAP)	長生合同庁舎	1
12月6日	もばら稲作部会・もばら機械銀行反省会	J A 長生茂原支所	16
12月8日	園芸生産振興全体会議	J A 長生本所	22
12月9日	経営体育成セミナー総合研修 (営農計画作成)	長生合同庁舎	4
12月9日	農事組合法人長生産直ミニトマト部ほ場巡回	白子町・茂原市	8
12月9日	J A 長生施設野菜部会 越冬トマト部圃場巡回	一宮町	13
12月12日	長南町露地野菜出荷組合ブロックリー目揃え会	J A 長生長南支所	11
12月14日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、長生村、一宮町	10
12月14日	長生農業研究会解散報告通知		8
12月14日	白子町稲作研究会反省会	J A 長生南部営農購買センター	12
12月15日	農事組合法人長生産直トマト部ほ場巡回	白子町・茂原市	8
12月15日	J A 長生農産物共進会 (越冬トマト)	一宮町、J A グリーンウェーブ長生	11
12月16日	白子町玉葱出荷組合 葉ニンニク出荷査定会	J A 長生白子選果場	11
12月19日	農業経営研修会 (インボイス制度)	長生合同庁舎、オンライン	23

日 時	内 容	場 所	参加者数
12月19日	土地改良事業「両総松潟支線」推進協議会 (白子町、長生村)	白子町役場、長生村役場	15
12月20日	茂原市八幡原地区基盤整備定例会議	茂原市役所	10
12月20日	長生村露地野菜出荷組合 葉タマネギほ場巡回	長生村	8
12月20日	土地改良事業「両総松潟支線」推進協議会 (一宮町)	一宮町役場	12
12月21日	J A 長生施設野菜部会 春期トマト生産班会議	J A グリーンウェーブ長生	12
12月21日	J A 長生施設野菜部会 抑制キュウリ部生産班会議	J A グリーンウェーブ長生	6
12月22日	白子町玉葱出荷組合 タマネギ石井食品販売会議	J A 長生白子支所	20
令和5年1月	長夷ブラックアンドホワイトショウ総会（書面決議）		15
1月27日	千葉県指導農業士会長生・夷隅・安房・君津地区4郡交流会	白子町、一宮町	34
2月1日	経営体育成セミナー基本研修（販売流通）	長生合同庁舎	7
2月10、15、16日	J A 長生施設野菜部会 春期トマト全戸巡回	一宮町、白子町、長生村	30
2月13日	小菊の会講習会	長生合同庁舎	11
2月16日	アグリライフ長生総会	長生合同庁舎	16
3月3日	経営体育成セミナー閉講式	長生合同庁舎	22
3月9日	長生ヤングパワーズクラブ総会	長生合同庁舎	8
3月10日	長生地区指導農業士会総会	長生合同庁舎	8
3月20日	農業士協会長生支部総会(書面決議)		12

令和4年度普及活動の実績  
普及活動の軌跡  
(Part-28)

発行年月 令和5年3月

発行 千葉県長生農業事務所 改良普及課

〒297-0026

千葉県茂原市茂原1102-1

TEL 0475-22-1771

FAX 0475-25-2061

URL <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-chousei>